

# 恋人はスナイパー(劇場版)

2004(平成16)年4月25日鑑賞(道頓堀東映)



監督=六車俊治/原作=西村京太郎/出演=内村光良/水野美紀/阿部寛/竹中直人/中村獅童/いかりや長介(東映配給/2004年日本映画/112分)

……テレビ版『恋人はスナイパー』『エピソードI』『エピソードII』の劇場版。予告編で見た水野美紀がカッコ良かったので観に行っただけのもの。大層に騒ぐほどのものでもないが、まあ楽しめるか……？ それにしても、ウッチャンこと内村光良のまじめな演技をはじめて観たが……？

## 「スナイパーもの」アレコレ

スナイパーとは狙撃手のこと。『SHOW - HEY シネマルームⅢ』でとりあげた『山猫は眠らない2-狙撃手の掟-』(128頁)の評論の「見出し」で、私は下記のように書いた。

### 記

超ロングランの人気マンガ『ゴルゴ13』の「お仕事」はスナイパー。また、スナイパーを主演として登場させた名作映画は、『ジャッカルの日』(73)、そして最近『スターリングラード』(01)。狙撃には集中が必要。そこで思わず観客も身を乗り出してスクリーンに集中する。「狙撃手モノ」と「潜水艦モノ」は共通点があって面白い。

このように、「スクリーンに集中して思わず手に汗を握り……」というのが「スナイパーもの」の本来の売りのはず。

ところがこの映画の後半では、ライフルを振り回しての格闘や至近距離でのライフルの乱射シーンなどが……。本来ライフルはそんな風に使われるものではないから、これはちょっと……？

この映画は、「スナイパーもの」の本筋を少しはずして、「アクションもの」にしてしまったのでは……？

## 走る女刑事！ 水野美紀

私が劇場にきた主な動機は、ウッチャンこと内村光良の「スナイパーぶり」よりも、水野美紀の「女刑事ぶり」を観るため。水野美紀扮する女刑事、円道寺きなこの活躍ぶりは確かにカッコいい！

しかし、それにしてもよく走る。刑事は「足で稼ぐ仕事」と言われるが、それは地道な捜査をくり返すことを表現したものだ。ところがこの映画では、犯人を追かけるために走るシーンがいかに多いことか！ なお水野美紀のカンフーの技は、十分板についたものでお見事！

## ウッチャンの狙撃手ぶりは？

『恋人はスナイパー』のテレビ版である『エピソードⅠ』『エピソードⅡ』では、ウッチャンの名狙撃手ぶりが披露されていたのだろうが、エピソードⅢとなるこの劇場版では、はっきり言ってそれはない。

むしろ、後半のハイライトである高層ビルの屋上での「狙撃合戦」では、ウッチャンは弟分のハン・ホアチン范火清（中村獅童）とホントのワルの神宮児正午（阿部寛）の2人から腕や足を撃たれて逃げ回るシーンがほとんど。

最後にやっと、神宮児正午を片づけるものの、ウッチャンがカッコいいのは、狙撃手としてではなく、きなこを愛する心優しい男性として……。

## よくできた設定だが……

『エピソードⅠ』『エピソードⅡ』で、既に主人公である狙撃手の王ウオン・カイコー凱歌は逮捕され刑に服しているため、本作では王凱歌の弟分の范火清が「ワル」になり、「1211」という組織を悪用している。犯人から首相官邸に入ってきた電話は、「日本国民1億3千万人を誘拐した。身代金は5千億円」というもの。無差別に国民が狙撃されるのだから、この脅しはきつく、防ぎようがない……？

この范火清と結びつき、これを指導しているのが何と、政府の上層部とも深い

つながりのある、警視庁の顧問弁護士の神宮児正午。こんなワル役になぜ弁護士を登場させるのかよくわからないが、これで弁護士のイメージがまた悪くなるのでは……？

## 脇役は充実

「1211」のボス、コー・村木に扮するのは、こういう映画にはなくてはならない存在である竹中直人。

そして王凱歌の弟分の范火清には、歌舞伎の名門である萬屋に生まれ二代目獅童を襲名した、中村獅童。

『阿修羅のごとく』（03年）での、深津絵里が扮した三女、竹沢滝子（第27回日本アカデミー賞最優秀助演女優賞を受賞！）のお相手となった、ロクに口のきけない、無器用で誠実な恋人役の演技は強く印象に残るものだった。しかしこの映画では、いつもガムを噛みながら、世の中に反抗してライフルで人を狙撃するのが楽しみ（？）だけの「出来の悪いガキ」の役。

あまり得な役（？）ではないが、なるほどうまく、憎たらしく（？）演じている。

そして、きなこの父親、円道寺雁太郎に扮するのがいかりや長介。チョイ役だが、渋い演技はさすが。これが彼の最後の出演作となってしまったのは残念。合掌……。

2004(平成16)年4月26日記